



フレーベルの子守歌

孤蓬生

母ははといものは、其本能そのほんのうとして、其子供そのこどもの四肢ししを運動うごさせる爲ためにいろ／＼な一寸ちよつとした遊戯あそびを發明なつして子供こどもにやらせる、それは子供の發展はつちんを助ける事は勿論もちろんであるが然し一般はんに本能的ほんのうてきの仕事しごとは不完全ふくせん、不理論ふりろん的たるを免れないで、只世ただよの母ははや乳母うほが本能的遺傳ほんのうてき的てきにやつてゐるのを改良かいはつして理論りろんに合あひ眞まことに子供の爲ためになるやうにしたらよからうといふのがフレーベルの考かんがであつた、子守歌こもりうたの如ごときも同じである、一体歌いつたいうたといふものは人の心情しんせうが表あらわてられて出來るものであるが又反射またなげしてき的に其歌そのうたが心の方に影響へんやうするものである。或人あるひとの言葉ことばに國歌こくかによりて法律ひつちうの必要すくが少すくなくなるといつたのはやはり歌うたの人情風俗じんじやうふうぞくに大きな關係くわんけいのある事ことをいふたの

であらう。してみると子守歌こもりうたなどは常に、口も利くちもきけぬ内うちから謠うたつて聞かせてゐるものだから最も注意ちういすべきものであらう。昔むかしから代々相傳あひつたはつて來た子守歌こもりうたといふものは各文明かくぶんめいに相似おぼたものが多い之は即ち本能的ほんのうてきに作られる者であるからであるがフレーベルは之等子守歌こもりうたの中からよく目的てきに適あふものを集めた。彼は此子守歌このこもりうたの觀察研究くわんさつけんきうには非常ひじょうに苦心くしんしたもので、百姓ひやくしやうの家へ行つて母ははが子守してゐるのを見たり歌を謠うたつてゐるのを聞いた町へ出れば乳母車うほぐるまの後から乳母うほの歌を聞いている様にした、母といふものは子供こどもに對して黙まつてゐる事はない何んな小さい赤ん坊あかむちにでも始終しじう何か話をしてゐる之は人間にんげんに最も必要ひつちうである言葉ことばを早くから子供こどもに聞き習ならはせて覺おぼえさせようといふ本能的の動作どうさである、父母ふぼはその言葉ことばと同じく何といふ事ことなしに只歌ただうたを謠うたつて聞かすのであるが、別に此歌このうたで如何どうしやうといふ事ことはない、只盲目的ただもうしやうてきにやつてゐる、フレーベルは此等の簡單かんたんな歌うたの中に重大じゆうだい

意味を發見して、之を教育上に應用しやうとしたのである、即ち彼は之によつて子供の身体の發展同情、自然との關係を知しむる等に利益を數へたのである、一母は幼兒にとりては自然界の媒介役であるから機會を捕へては自然界を紹介する勞をとらなければならぬ。

こゝにフレーベルの子守歌といふも只我國のねね歌とは別で之は運動を伴ふた一種の幼ない唱歌である、氏は之を作つて世の母たる者の爲に資したのである、極く幼稚な者には勿論体操の様な身体の各筋を悉く運動さすといふ様な事は出来ないからそう嚴格なものとはとても出来ないで、氏のいふて居る中には手の運動が重である、小さい子供を外へ連れて出ると先づ子供は運動してをるもの揺いてをるものを認める、例へば旗だとか風見だとかいふやうな物に目が付く、で氏は「風見」といふのを初めに出してゐるが之は子供が最早言葉が分る様になつたなら、之に風の吹く時

の有様を説明するのに用られやうとふいのである。

○風見

之は掌をひろげて前て出しゆらく動かすのである、即ち手、腕、の筋肉を運動させる爲のものである次にある格言とあるのは母の爲にしたもので子供の歌とあるのが即ち子供に歌はすのである。勿論之は一寸いきなり譯したのであるから意味がわかる丈で口調や何か、全く表す事が出来ないのである、讀者諸君は只こんなものだらうと想像して御參考に供して貰ひたい。

附の格言

坊やが目ん目で見るもので
たやすい教を見つけんとなら
母ちやん達が思ふなら
見せて物の名教へたら
直ぐに其眞似させなさい
坊やは喜びならいませう

子供の歌

風がふいてぐるぐると

屋根の風見がまはるやうに

小さい坊やの手をまはし

ぐるぐるとならいませう

次に出てゐるのは月に付てのです。

○子供と月

母の格言

なぜに遠くにあるものが

坊やにや近く見えるのか

なぜに坊やは遠いものを

近くへよこさうとするのだろ

母よ此には深い意味

神祕のしるしを神さまが

坊やの汚れぬ魂に

刻み込んだぢやないですか

それは子供のころには

天地も海も大空も

一緒にしてゐるよき夢を

破らぬやうとの教です

それは子供の心には

限る界がありません

子供に見える物みなは

大きく縮いた全体と

見えるものと教へます

かういふ子供の知覚には

貴い真理はないですか

神が天地に與へたる

則のしるしはないですか

愛のみ則のかんしるし

愛と一如の源を

み神によりて學ぶやう
母よ！坊やに教へなさい

坊やのこんなよい夢を

決して破つちやなりません

變らぬ愛を見るやうに

開いた心に教へなさい

坊やに出でよごらんない

お一月さんがのーぼつて

「お一月さんよ大空の

きれいなラちから下りてこい」

「坊やのところへ行きたいが

青いお家を出られません

だから照して上げませう

「私は下へ下りて来て

坊やのよい子と遊べない
けれども毎晩出て来ては
上から坊やを照らします

「こんなに離れてゐるけれど

二人は中よいお友達

おとなでゐたらば又ぢきに

母ちやんと坊やを照らませう」

子供の歌

「二人は友よお一月さん

お前が上から照らすなら

坊やはうれいすぐおいで

か愛がつてあげませう」

總てにんな流儀でまだいろんなものを作つてゐる

「鳥の巢」とか「花籠」とかいふのもある何れも自然

界に親むと同時に身体の或部分を運動させ又言葉

を教へ兒童の子供らしい無邪氣な所を發展させる

やうにとめてゐる。

